



GHIT Fund

Global Health Innovative Technology Fund

# Annual Report 2024

GHIT Fund 2024年度年次報告書

# Annual Report 2024

GHIT Fund 2024年度年次報告書

GHIT Fund

Global Health Innovative Technology Fund

## CONTENTS

代表あいさつ	03
GHIT R&D Forum 2024 イベントレポート	05
世界から「見過ごされてきた」病気たち	09
顧みられない熱帯病 (NTDs)を知る ハンセン病	11
ポートフォリオ	13
臨床試験～薬事申請等	15
Special Feature	17
2024年度投資採択案件	19
2024年度の活動ハイライト	22
ストラテジックプラン FY2023-FY2027	27
財務報告	29
リーダーシップ	31
資金拠出パートナー&スポンサー	33
組織概要	34





Special Thanks to: Côte d'Ivoire's Ministry of Health and Shota Koyano



## 代表あいさつ

# パートナーシップが導く 未来への躍進

### 戦略的ビジョンの推進

2024年度は、私たちが掲げた第3次5カ年計画「GHIT 3.0」の2年目にあたり、これまでの活動を具体的な成果へと結びつける1年となりました。「イノベーションの加速」、「製品開発の投資インパクトを最大化」、「パートナーシップで生み出す化学反応」の3本柱のもとで着実に歩みを進め、パートナーシップが紡ぐ「変革を生み出す力」を具体的な成果へとつなげることができました。

特に誇らしい成果は、住血吸虫症治療薬の開発と供給への取り組みです。GHIT Fundが支援する国内外の製薬会社が中核となった小児用プラジカンテル・コンソーシアムのプロジェクトにおいて、実装研究が成功裡に行われ、現地患者への薬剤提供の道を切り開くという重要な成果を達成しました。2025年3月にはウガンダとコートジボワールの就学前児童に投与され始めました。この成果は、2023年12月の欧州医薬品庁による肯定的な科学的見解を受け、2024年5月に世界保健機関（WHO）の事前認証済医薬品リストに登録されたことを経て実現した画期的な進展です。この「研究室での知見」を約5,000万人の就学前児童の命を救う「治療法」へと変えた取り組みは、グローバルなパートナーシップが導き出した成果です。2025年にはWHOの必須医薬品リストへの追加も期待されており、GHIT Fundはさらなるアクセス拡大に向けて各国のパートナーとともに取り組んでいきます。

### グローバルパートナーシップの強化

2024年には2つの新たな協力関係を構築して、GHIT Fundの活動基盤をさらに強化することが出来ました。新たにオープン・フィランソロピー（Open Philanthropy）がスポンサーに加わっていただいたことによりGHIT Fundの資金調達活動の幅が広がり、研究開発を加速する財政基盤がさらに強

國井 修

CEO・専務理事

化されると期待しています。また、WHOとの連携を深め、「顧みられない熱帯病に関するロードマップ2021-2030」に沿った活動を進めてまいります。これらの連携を通じて、我々の目指す変革を着実に実現していきます。

さらに、12月に東京で開催したR&D Forumには、日本国内外の民間企業、アカデミア、研究機関、NGO/NPOから120名以上が参加し大盛況でした。このフォーラムは、グローバルヘルスR&D分野におけるGHIT Fundの地位を確固とするばかりでなく、ヘルスケアのニーズ、技術、製品開発に関する専門家が意見を交わす貴重な場となりました。

---

### ともに生きる未来を築く

---

GHIT Fundは多様性(ダイバーシティ:Diversity)、公平性(エクイティ:Equity)、包括性(インクルージョン:Inclusion)を基盤としたアプローチを進めるため、新たにダイバーシティ推進委員会を発足させました。この委員会では、ジェンダー平等や包括性の進捗をデータで可視化し、活動の透明性を確保すると同時に、改善のために必要な行動を議論しています。そして、専用ウェブページを通じて、最新情報や理念を広く発信し、社員を始め多くの人々に活動の意義を共有しています。これらの取り組みは、我々の描いてきた夢を具体的な成果に変える基盤となり、顧みられない感染症対策に新たな希望をもたらします。革新と連携の積み重ねが、次なるステージへの扉を開き、未来への道を照らすものと考えます。

---

### 感謝と未来への展望

---

2024年度のGHIT Fundの成長と成果は、パートナーやスポンサーの皆さまの絶え間ないご支援なしには成し遂げられませんでした。私たちのビジョンに共感し、継続的にご支援くださる皆さまに心より感謝申し上げます。2025年度に向けて、私たちは「GHIT 3.0」の高い目標に向けた挑戦を続け、変化するグローバルヘルスの課題と激変するR&Dを取り巻く環境に果敢に立ち向かうこととお約束します。

GHIT Fundの社員一人ひとりが日々挑戦と努力を続け、ステークホルダーの皆さまとともに未来を切り開きます。今後とも変わらぬご支援とご協力を心よりお願い申し上げます。



中谷 比呂樹

中谷 比呂樹

会長・代表理事

# GHIT R&D Forum

## イベントレポート

### 2024

2024年12月5日に開催されたGHIT R&D Forum 2024では、民間企業、アカデミア、研究機関、NPO/NGOのリーダーが集まり、グローバルヘルスにおける新しい技術やイノベーション、パートナーシップの構築について熱い議論が交わされました。日本と世界のパートナーとの橋渡し役を務めるGHIT Fundの使命が再確認され、セクターを超えた協力を呼びかけるフォーラムとなりました。

#### モデレーター総括

5年ぶりにR&D Forumの開催が実現し、国内外からの参加者が熱い議論を交わす姿に、非常に感銘を受けました。顧みられない感染症に立ち向かうため、GHITは低中所得国を中心とした現地のニーズを汲み取り、パートナーとともにグローバルヘルスの課題解決に取り組んでまいります。パートナーからの声を聴くことで現場のニーズを再確認し、GHITの役割を改めて認識できた学びの多いフォーラムとなりました。



小山恵理子  
GHIT Fund  
投資戦略

## Keynote Speech

People centered innovation: connecting the dots on innovation, access and delivery



Dr. Mandeep Dhaliwal  
United Nations Development Programme (UNDP)

国連開発計画 (UNDP) のマンディーブ・ダリワル氏は、人間の安全保障とユニバーサル・ヘルス・カバレッジ (UHC) における日本のリーダーシップに焦点を当て、途上国における保健技術のアクセス改善に向けた協調的な取り組みを紹介しました。また Access & Delivery Partnership の「Uniting Efforts」イニシアティブに基づいたアクセスポリシーおよび医療システムの強化に関する調査結果も発表しました。

## Session 1:

結核へのニーズ — 医療技術の革新からラストマイル到達まで —



Dr. Jacob Creswell  
Stop TB Partnership



Mr. Hirotaka Michiba  
FUJIFILM Corporation



Dr. Elana Van Brakel  
IAVI

結核の感染対策や予防について議論する本セッションでは、早い段階での承認・規制の立案計画やパートナーシップの重要性が強調されました。毎年250万～300万件におよぶ結核の診断見落としという深刻な現状や、AIを活用したX線検査や新しい検査方法の導入について議論しました。またMTBVACワクチンの臨床試験や、富士フィルムのエチオピアでのポータブルスクリーニングの成功事例が紹介されました。



## Session 2:

パンデミック対策に向けたNTDイノベーションと保健システムの連携



**Dr. Masahiro Kajihara**  
Hokkaido University



**Dr. Charles Mowbray**  
Drugs for Neglected  
Diseases initiative (DNDi)



**Dr. Nobuo Saito**  
Nagasaki University



**Dr. Aya Yajima**  
WHO South-East Asia Region (SEARO)  
[Video Presentation]

本セッションでは、東南アジアにおけるNTDs制圧の成功例と現在も残る課題について、特に内臓リーシュマニア症とデング熱に焦点をあてて議論を行いました。また、感染症流行地域での製品導入の成功要因とパンデミック対策について、フィリピンにおける狂犬病対策や、ザンビアにおける「パンデミックを引き起こす可能性のあるウイルス」の特定に関する研究事例も紹介されました。

## Session 3:

マラリアに関するニーズ — 地理的差異に対処するためのアプローチ —



**Prof. Arjen Dondorp**  
Mahidol-Oxford Tropical Medicine  
Research Unit (MORU)



**Prof. Osamu Kaneko**  
Nagasaki University



**Prof. Eizo Takashima**  
Ehime University



**Dr. Paul Willis**  
Medicines for Malaria Venture  
(MMV)

本セッションではマラリアの制圧に向けて、Medicines for Malaria Venture (MMV)による多剤併用療法と持続性注射剤の開発、マヒドゥン・オックスフォード熱帯医学研究ユニットによる薬剤耐性に対するアルテミシニン誘導体を組み合わせた三剤併用療法の研究、愛媛大学による「コムギ無細胞タンパク質合成系」を用いたワクチン開発、そして東南アジアにおける人獣共通マラリアに関する長崎大学の研究の4つの対策が議論されました。これらの取り組みにより、マラリア制圧への対策に異なる科学的アプローチが必要であることが提示されました。

## ネットワーキングセッション

R&D Forumの醍醐味はネットワーキングです。民間企業、アカデミア、研究機関、NGO/NPOなど様々なフィールドから参加している皆さんと楽しく交流するため、「お名前ビンゴ」を開催しました。「あなたの専門分野は?」「あなたが訪れたことのある低中所得国は?」など互いの理解を深めながら、自己紹介をした相手のお名前のアルファベットでビンゴゲームをしました。会場が賑やかな雰囲気に包まれると同時に、各方面から「ビンゴ!」の声が上がりました。



## Session 4:

現場の技術 — LMICsにおける新技術の適応 —



**Dr. Jeremy Burrows**  
Medicines for Malaria Venture  
(MMV)



**Ms. Mariko Kitahama**  
NEC Corporation



**Dr. Keita Wagatsuma**  
Niigata University



**Dr. Peter Warner**  
Gates Foundation

本セッションでは、低中所得国 (LMICs) における新規の技術導入について議論し、主要なグローバル機関による技術導入イニシアティブを分析・議論しました。パネルディスカッションでは、AIや新しいテクノロジーが創薬に果たす役割について探求され、結核やマラリアにおけるイノベーションについても意見交換が行われました。また、個人識別システムの実践的な現場への導入方法や気候変動が感染症対策に及ぼす影響についても考察を行いました。

## Session 5:

R&Dからアクセス&デリバリーまで — エンド・トゥ・エンドのエコシステム構築に向けて —



**Dr. Ashley Birkett**  
PATH



**Dr. Timothy Endy**  
CEPI



**Dr. Loice Kikwai**  
MARKET ACCESS AFRICA



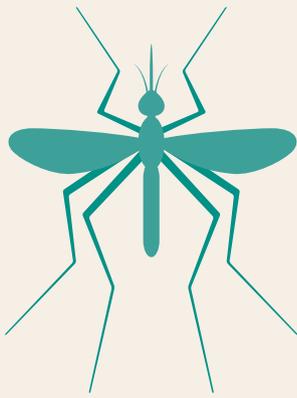
**Dr. Oumar Ndiaye**  
Institut Pasteur de Dakar

研究開発の成果を公平なアクセスに結びつけるという複雑な課題について深く掘り下げ、製品開発パートナーシップがワクチンの革新にどのように貢献しているかを議論しました。また次のパンデミックに備えたイニシアティブや、アフリカ現地での製品製造の可能性について、特にダカル・パスツール研究所のDIATROPIXをはじめとする地域診断機器メーカーの成功事例に焦点を当てて探り、戦略的なパートナーシップと規制の枠組みの重要性が鍵となることが確認されました。



# 世界から「見過ごされてきた」病気たち

マラリア、結核、顧みられない熱帯病 (neglected tropical diseases : NTDs) などの感染症は世界で17億人以上に影響を及ぼしていますが、治療や予防のための研究が進まず対策のための資金や人材も不足しています。マラリアだけでも感染者数は年間推定2億6,000万人以上、結核だけでも死者数は120万人を超え、これらの疾患は世界の最貧困層において病気、障害、偏見、生産性低下、貧困の連鎖を生み出しています。



## マラリア

2023年感染者数

**2億6,300万人**

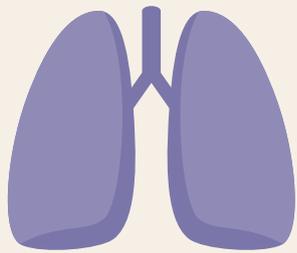
2023年死亡者数

**59万7,000人**

マラリアは、マラリア原虫を媒介する蚊（ハマダラカ）に刺されることによって感染します。感染すると、赤血球が次々と破壊され貧血となり発熱・震えなどの症状を引き起こし、治療が遅れ重症化すると死に至ることもあります。マラリアを引き起こす寄生虫は5種類存在し、なかでも熱帯熱マラリアと三日熱マラリアが最大の脅威となっています。

### 撲滅への道のり

44の国と1つの地域がWHOから正式にマラリアのない国として認定されたが、未だに80か国以上で流行し、地球温暖化や移民などの影響で感染者が増加している国もある。



## 結核

2023年感染者数

**1,080万人**

2023年死亡者数

**125万人**

結核は新型コロナウイルス感染症を上回る感染症による死因のトップです。(2024年11月WHO調べ) 空気中の飛沫を介して広がり、感染者の多くは無症状ですが、高齢になったり、免疫力が低下した場合に発病することがあります。特にHIV/AIDSでは結核に罹りやすく、主な死因となっています。結核菌は通常肺を攻撃しますが、他の臓器に影響を及ぼすこともあります。高齢化や移民により感染者が増加しながら診断・治療がなされていない、不適切な治療などにより薬剤耐性が増えているといった国・地域もあり、結核は今でも対策が困難な疾患です。

### 撲滅への道のり

結核による死亡者数は減少傾向だが、現在の減少率では2035年の国際目標に到達するのは絶望的。



## 顧みられない熱帯病

2023年感染者数

**15億人**

顧みられない熱帯病 (NTDs) はウイルス、細菌、寄生虫、真菌、毒素によって引き起こされる21の疾患です。主に熱帯の貧困地域に影響を及ぼし、気候、生活環境、文化・風習、媒介動物などの要因が複雑に絡みあうため、対策が困難です。NTDsは健康だけでなく、社会、経済に壊滅的な影響を与えますが、研究資金が不足しており、効果的な診断や治療薬がないの見過ごされ、放置されているものもあります。

### 撲滅への道のり

50か国が少なくとも1つの顧みられない熱帯病の排除に成功したが、100か国以上で未だ流行している。

# 21の顧みられない熱帯病



## ブルーリ潰瘍

土壌や水中に存在する菌が、皮膚の傷や虫刺されなどから体内に侵入して起こる皮膚病で、早期に治療を行わなければ、進行して潰瘍(皮膚の深い傷)となり、骨まで破壊し、変形や機能障害を残すことがあります。



## シャーガス病(アメリカトリパノソーマ)

主にサシガメ類の昆虫に刺され、傷口や目・口などから体内に侵入して感染する寄生虫病で、初期段階では発熱、筋肉痛などの軽い症状ですが、感染から数年から数十年後に心筋症や心不全、巨大食道・巨大結腸などをきたし、突然死に至ることもあります。



## デング熱

マラリアとは異なる蚊(ネッタイシマカなど)によって媒介され、突然の発熱、激しい頭痛や関節痛、筋肉痛などを伴い、発疹が現れることもあります。重症化すると出血やショック症状を伴い、死に至ることもあります。



## 包虫症(エキノコックス症)

寄生虫卵で汚染された食物や水の摂取、キツネやイヌなどの動物との接触によって広がる寄生虫感染症で、肝臓、肺、腎臓、脳などで包虫が発育して様々な症状を引き起こし、死に至ることもあります。



## リーシュマニア症

サシチョウバエに刺されることで感染する寄生虫病です。主に皮膚、粘膜、内臓に多様な症状を引き起こす3つの型があり、特に内臓リーシュマニア症は、治療せずに放置すると死に至ることもあります。



## リンパ系フィラリア症(象皮病)

フィラリアという寄生虫が蚊を媒介して感染し、リンパ節などに寄生する病気。皮膚や皮下組織が線維化、肥厚、角化して手足や陰囊などが象の皮膚のような外観となります。恒久的な障害や社会的経済的損失をもたらし、偏見や貧困の一因となることがあります。



## マイセトーマ

農業労働者や裸足で生活する人々に多く見られ、主に足の傷口から侵入する細菌や真菌による感染症です。初期は無痛性の皮下の腫れやしこりですが、進行すると骨や筋肉を侵し、変形、機能障害を起こし、二次感染や敗血症から死に至ることもあります。



## オンコセルカ症(河川盲目症)

ブユに刺されて感染する寄生虫症で、激しい痒み、発疹、皮膚の肥厚・萎縮などをもち、寄生虫が眼に侵入すると炎症を起こし、視力障害や失明に至り、感染性失明の世界第2位の原因となっています。



## 住血吸虫症

川に生息する巻貝が媒介する寄生虫病で、腸や膀胱などの静脈に寄生して産卵し、腹痛や血尿、血便などの症状が現れます。治療せずに放置すると、膀胱がんや肝臓障害を引き起こし、死に至ることもあります。



## 土壌伝播寄生虫症

汚染された土壌や食物による寄生虫感染症の総称で回虫、鉤虫、鞭虫などがあり、それぞれ腸閉塞や咳、皮膚のかゆみや発育障害、血便や貧血など多彩な症状を引き起こします。



## ギニア虫症(メジナ虫症)

ギニア虫の幼虫を取り込んだミジンコがいる水を飲むことで感染する寄生虫病です。幼虫は腸壁を貫いて腹腔、さらに皮下組織へと移動しながら成長し、最終的に特に足の皮膚を突き破って体外に出ます。激しく焼けつような痛みを伴います。



## 食物媒介吸虫類感染症

吸虫が付着した魚介類や野菜を加熱不十分な状態で食べることで感染し、発熱や腹痛を引き起こし、吸虫の種類によっては肝臓や肺などを侵し肝硬変、呼吸困難などの症状をもたらします。



## アフリカ睡眠病(トリパノソーマ症)

ツェツェバエが媒介する寄生虫病で、初期は発熱やリンパ節腫脹、進行すると重篤な神経症状と睡眠障害を引き起こす、致死率の高い感染症です。



## ハンセン病

らい菌による感染症で、感染力は極めて低いが皮膚や末梢神経が侵され、進行すると手足や顔面などに変形や障害を残すため、偏見や差別の対象になっていた時代・国があります。



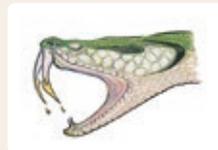
## 狂犬病

狂犬病にかかった動物の唾液が咬傷や傷口から体内に侵入して感染するウイルス性疾患です。咬傷部位の痛みやしびれ、発熱、食欲不振などから始まり、進行すると、興奮、幻覚、麻痺などの神経症状が現れ、最終的にはほぼ100%死に至る病気です。



## 疥癬

人から人へ感染する寄生虫感染症で、ダニのタンパク質や糞に対するアレルギー反応により、激しい痒みと発疹を引き起こします。



## 蛇咬傷

毒ヘビに噛まれるなどして毒が体内に入ると、呼吸麻痺や危険な出血、腎臓障害、組織死を引き起こします。



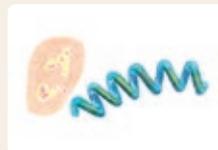
## トラコーマ

不衛生な環境で人から人への接触やハエや昆虫が媒介する細菌性の目の疾患で、眼のまぶたや結膜の炎症を繰り返すと角膜などを傷つけ、視力低下や失明に至ることもあります。



## 囊虫症(条虫症)

汚染された食物や水に潜むサナダグシの卵や成虫によって引き起こされる寄生虫感染症で、ほとんど無症状のことが多いが、数か月から数十年後に視力障害やてんかん発作麻痺などの脳の障害を引き起こし、死に至ることもあります。



## フランベジア(イチゴ腫)

擦り傷や切り傷を介した皮膚の接触によって広がる細菌感染症で、皮膚、骨、軟骨に慢性的な腫瘍や潰瘍を形成し、外観の変形や身体障害を引き起こすこともあります。



## ノーマ(壊死性潰瘍性口内炎、水瘡)

極度の貧困や栄養不良、劣悪な環境などによって口腔内で起こる感染症です。歯ぐきや頬粘膜の炎症・潰瘍から始まり、進行すると顔面の組織や骨が破壊され、食事や会話困難となり、敗血症や呼吸困難で死亡することもあります。

## 顧みられない熱帯病 (NTDs) を知る

# ハンセン病

ハンセン病は顧みられない熱帯病の21の疾患群の一つであり、日本とも深い関わりのある病気です。現在では治療が可能な病気ですが、社会的病気ともいえる偏見や差別の対象となってきた長い歴史があります。制圧に向けた活動、人権との関わりについて学びます。



南里隆宏理事長  
笹川保健財団

### ハンセン病とは

ハンセン病は、感染力も発病性も非常に弱い細菌(らい菌)によって引き起こされる感染症です。感染後、平均3年、長い場合には20~30年の潜伏期間を経て、まずは皮膚や神経に症状が現れます。一般的な初期の症状は、皮膚にあらわれる斑紋です。斑紋には知覚(痛み、温度、触れる感じ)がなく、この特徴を保健職員がハンセン病を診断するときの判定基準の一つとしています。ただし95%以上の人が免疫を持っているため、たとえ感染しても自然治癒し、発症することは極めて稀です。

### ハンセン病がもたらす障壁

感染患者を收容、隔離するという誤ったハンセン病対策が原因で、歴史的に、患者、回復者、その家族の人権が侵害され、偏見や差別の対象となるという社会問題が生じました。そうした背景から、治療法が確立した後も、偏見や差別を恐れて治療を受けずに病状が進行してしまい、運動障害や変形、後遺症に苦しむ方も少なくありませんでした。また、ハンセン病の治療前、治療中、治療後に起こる免疫反応である「らい反応」により、神経の炎症等を引き起こし、身体的障がいにつながることもあり、早期診断と早期治療、行政の支援等が必要です。

## ハンセン病の治療薬の変遷

1940年代初頭までは、インド原産の大風子油から作られた筋肉注射による治療法が広く使われていましたが、有効性が不確かでした。1943年以降はプロミンの有効性が報告され、1950年代以降はプロミンから有効成分を抽出した経口剤ダブソンが世界的に使用されました。1982年以降はリファンピシン、ダブソン、クロファジミンの2または3剤の多剤併用療法(Multidrug Therapy: MDT)がWHOによりハンセン病の標

準治療法として推奨されています。MDTの無償供与の実現により、ハンセン病制圧活動は推進され、2000年末には世界レベルでのハンセン病制圧が達成されました。しかし、いまだインド、ブラジル、インドネシアなどでは患者数が多く、世界全体で年間約20万人がハンセン病と診断され、依然として重要な課題と位置付けられており、ワクチン、予防薬の開発、早期診断法の確立が求められています。

## GHIT初のハンセン病への助成プロジェクト

Hope Rises International\*は15年以上前に Access to Advanced Health Institute (AAHI)と提携し、世界初のハンセン病に特化したワクチン LepVaxを開発しました。GHITが助成する今回のプロジェクト「ハンセン病ワクチンLepVaxの当事者参加型臨床研究」は、笹川保健財団、オズワルドクルス研究所、Hope Rises Internationalが協業し、ハンセン病流行地域であるブラジルでの臨床試験のフェーズ1およびフェーズ2の安全性試験を行います。これはサブユニットワク

チンであるLepVaxの健常者とハンセン病患者に対する安全性と免疫原性を実証することを目的としています。この臨床試験の先駆的な要素は、ハンセン病回復者の参画です。研究チームは緊密に連携して、ハンセン病当事者の視点や洞察を調査に反映することによって、倫理性の高い臨床研究の実現を目指しています。LepVaxの有効性が証明されれば、2040年までに80万人以上のハンセン病による障がい回避される可能性があります。

\*2025年3月にAmerican Leprosy Missions(アメリカハンセン病協会)から Hope Rises Internationalに団体名が変更されました。

### ハンセン病に苦しむ患者さんの声

「自分の経験を語ることで、人々の助けになりたい」

ブラジル当事者団体MORHANで活動するLuzia Alvesさん

私は2018年末にハンセン病と診断されました。1年間の治療を経て2020年に治癒しましたが、その後の「らい反応」により、歩行が困難になるほどの皮膚の炎症を経験しました。そうした中MORHAN\*と出会い、そこで仲間たちに励まされて自分自身を受け入れることができ、家族への感謝の気持ちが深まりました。

2024年からは、ハンセン病当事者が直面する制度的・複合的差別を記録するプロジェクトに、対話サークルのファシリテーターとして参加しています。活動を通じ、私と似た経験を持つ人だけでなく、私以上に苦しみを経験した人たちの存在を知りました。今後も自分の経験を語ることで、多くの人々の助けになりたいと思っています。



\*MORHAN: Movement for the Reintegration of Persons Affected by Hansen's Disease (ブラジルにおけるハンセン病患者や回復者の社会的包摂と権利擁護を目的とした非営利団体)

### GHIT社員有志で国立ハンセン病資料館を訪問

2024年9月に、社員有志で東京都にある国立ハンセン病資料館へ訪問しました。顧みられない熱帯病の一つであるハンセン病を知り、偏見や差別に苦しんだ歴史について学びました。人権について深く考え、感染症制圧に改めて向き合うきっかけとなりました。



# ポートフォリオ

探索研究

非臨床試験

治療薬/ワクチン

Target Research

Screening

Hit-to-Lead

Lead Optimization

診断薬

Target Research

Product Design



顧みられない  
熱帯病

シャーガス病



住血吸虫症



シャーガス病



シャーガス病、リーシュマニア症



その他



シャーガス病



オンコセルカ症



リーシュマニア症



マラリア

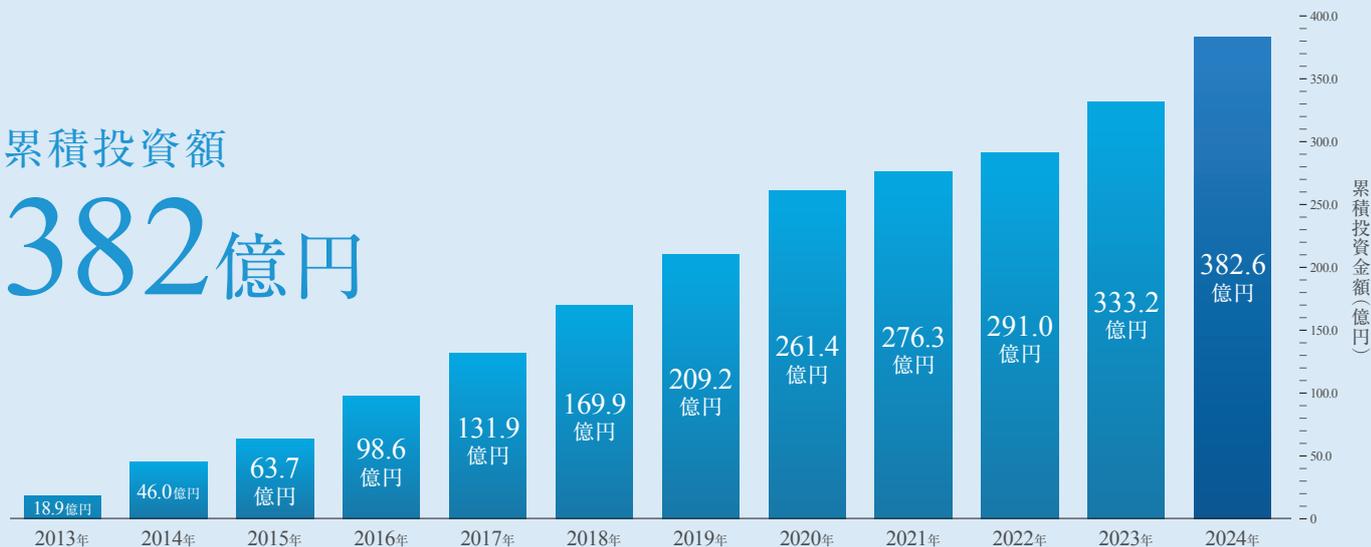


結核



累積投資額

382億円



各プロジェクトの詳細については、GHIT Fundのウェブサイト・ポートフォリオのページをご覧ください。

<https://www.ghitfund.org/investment/portfolio/jp>



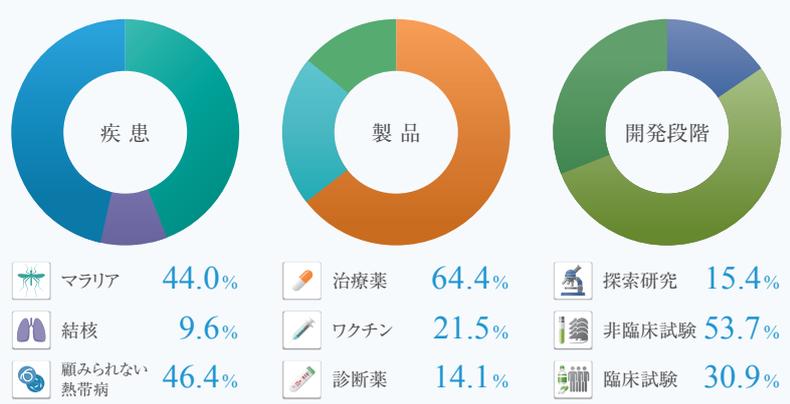
臨床試験



<p>リンパ系フィラリア症、オンコセルカ症</p> <p>トラコーマ</p>	<p>皮膚リウマチ性関節炎</p> <p>ハンセン病</p> <p>デング熱</p> <p>住血吸虫症</p>			<p>住血吸虫症</p> <p>マイセトーマ</p>

2025年3月31日時点

投資概要 (2013~2024年度)



2024年度

136件 投資案件

49億円 投資総額

186機関 製品開発パートナー

日本 63機関  
海外 123機関

18件 投資案件

# 臨床試験～薬事申請等

GHIT Fundが投資している臨床試験から薬事申請段階の後期開発プログラムは、世界各地で展開されています。ただし、一部のプログラムは現在準備段階にあり、今後開始予定です。製品を必要とする患者さんの手に届けるため、着実に歩みを進めています。

**SJ733**

マラリア／治療薬

開発段階: 第IIb相臨床試験  
対象国: ペルー




**ALAQ-FDC**

マラリア／治療薬

開発段階: 第III相臨床試験、承認申請  
対象国: ルワンダ、ウガンダ、アンゴラ、ナイジェリア、タイ






**AnAPN1**

マラリア／ワクチン

開発段階: 第I相臨床試験  
対象国: ガボン








**ホスラブコナゾール**

マイセトーマ／治療薬

開発段階: 承認申請準備中  
対象国: スーダン




**アメリカ**

**DENVLP vaccine**  
デング熱／ワクチン

**コロンビア**

**CpG-D35**  
皮膚リーシュマニア症／治療薬



CpG-D35 / © Sydelle Willow Smith-DNDi

**ペルー**

**SJ733**  
マラリア／治療薬

マラリア／治療薬  
武田薬品工業株式会社 他

**ボリビア**

シャーガス病／治療薬  
エーザイ株式会社 他

シャーガス病／診断薬  
栄研化学株式会社 他

**SchistoAbRDT-Sm**

住血吸虫症／診断薬

開発段階: 製品開発  
対象国: ケニア








**英国**

**CpG-D35**  
皮膚リーシュマニア症／治療薬

リンパ系ライリア症(象皮症)  
オンコセルカ症(河川盲目症)／治療薬  
エーザイ株式会社 他

**ブルキナファソ**

マラリア／ワクチン  
大阪大学微生物病研究所 他

**コートジボワール**

**arpraziquantel**  
住血吸虫症／治療薬

ブルーリ潰瘍／診断薬  
長崎大学大学院  
熱帯医学・グローバルヘルス研究科 他

**ブラジル**

**LepVax**  
ハンセン病／ワクチン

**パラグアイ**

シャーガス病／診断薬  
栄研化学株式会社 他

**アルゼンチン**

シャーガス病／診断薬  
栄研化学株式会社 他

**DENVLP vaccine**

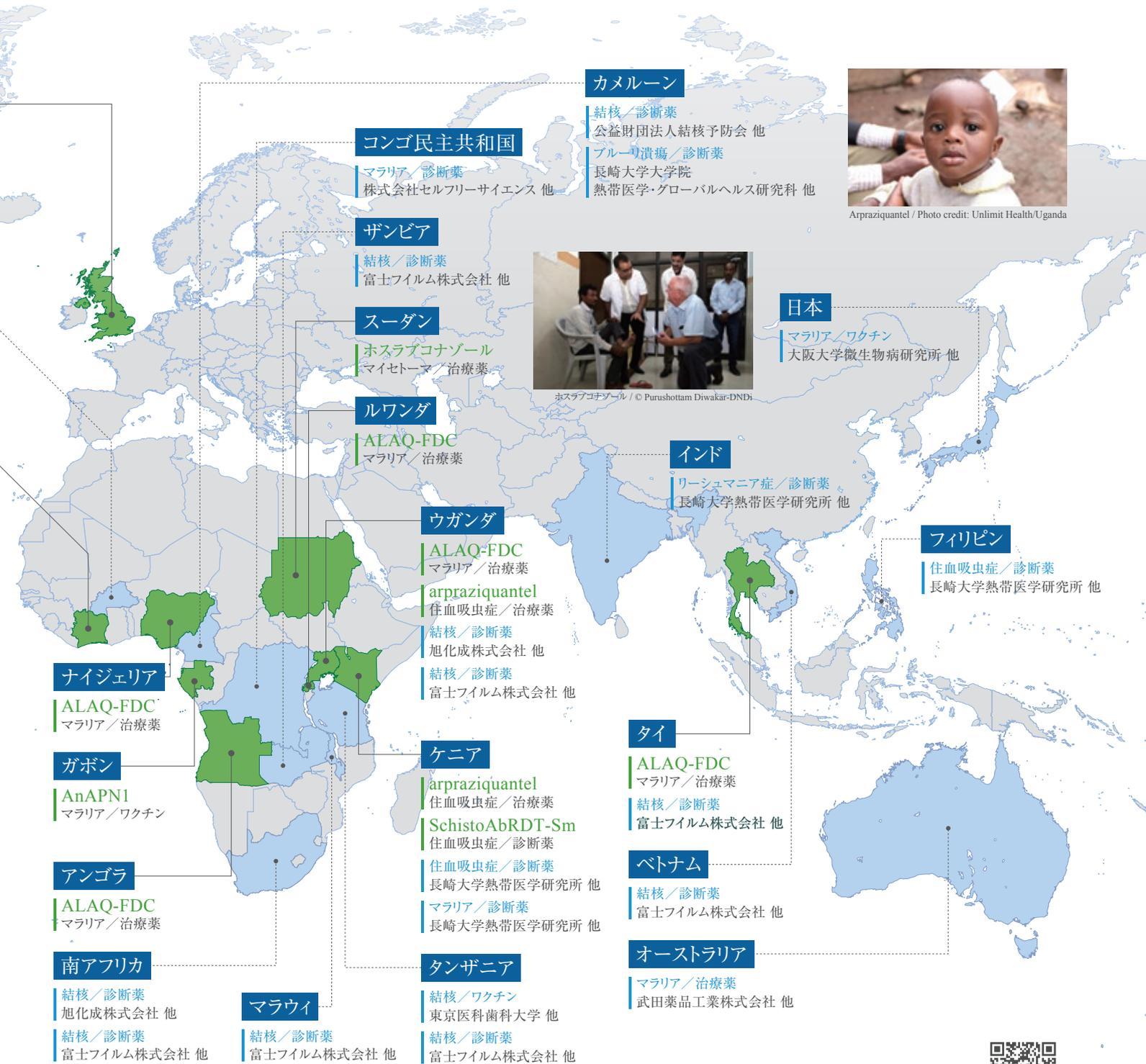
デング熱／ワクチン

開発段階: 第I相臨床試験  
対象国: アメリカ




■ = 進行中のプログラム ■ = 投資を終了したプログラム

\*本ページに掲載されている投資プログラムの情報は、試験進捗状況に関わらず、過去のアニュアルレポートや公開情報に基づいています。



臨床試験について各プロジェクトの詳細は、ウェブサイトでご覧いただけます。



**LepVax**

ハンセン病 / ワクチン

開発段階: 第I相臨床試験  
対象国: ブラジル

**CpG-D35**

皮膚リ-シュマニア症 / 治療薬

開発段階: 第I相臨床試験  
対象国: 英国、コロンビア

**arpraziquantel**

住血吸虫症 / 治療薬

開発段階: 承認申請、アクセス  
対象国: コートジボワール、ケニア、ウガンダ  
およびその他のまん延国



Photo credit: Kibuuka Makisa/Candid Local

## 10年にわたるイノベーションの成果： 支援が必要な子どもたちに 画期的な治療選択肢を提供

疾患：住血吸虫症  
製品：小児用製剤  
開発段階：承認申請、アクセス  
実施国：コートジボワール、ケニア、ウガンダ  
およびその他のまん延国



2025年3月、GHIT Fundが長年にわたり投資してきた成果として、新たな小児用住血吸虫症治療薬「arpraziquantel」が、ウガンダの就学前児童を対象に、実装研究の枠組みにおいて投与されました。これは、2013年のGHIT Fund創設以来、初めて支援を必要とする人々に治療薬が届けられたという大きな成果です。この道のりは、今後さらに多くの人に慎重かつ段階的に治療薬を導入するための最初の一步です。現在、実際の医療システムの中でどのように効果的に使用できるかを検証し、最適化するための研究が進められています。この取り組みは多様なパートナーの協力と持続的な支援があったからこそ実現しました。科学的な可能性を社会的なインパクトに変える「パートナーシップの力」を象徴した成果といえます。

GHIT Fundが支援する小児用ブラジカンテル・コンソーシアムによって開発された、子どもが服用しやすい治療薬は、世界的な健康問題における深刻な格差を解消するためのものです。主にサハラ以南のアフリカでは、5,000万人の幼い子どもたちが住血吸虫症に苦しんでいます。これまで適切な治療の選択肢がないことが大きな問題となっていました。

### 研究段階から命を救うまで

今回の画期的な成果は、10年にわたる献身的な努力とパート

ナーシップによって実現しました。日本でのイノベーションが礎となり、アステラス製薬株式会社が独自の技術を活用して初期の製剤を開発しました。水に溶けやすく、気候の影響を受けにくい設計で、幼い子どもが服用しやすいように苦みを軽減した錠剤です。その後、グローバルな協力により、ドイツのメルクが小児用製剤のプロトタイプをさらに最適化し、ブラジルのファルマンギーニョスに製造プロセスを移管して、現在製造を行っています。

初期の研究から臨床試験、そして実用化に至るまで、GHIT Fundが継続的に支援をしたことで、このイノベーションが現実のものとなりました。

### 大きな節目となった1年

2024年度には、arpraziquantelの開発において、いくつかの重要な節目がありました。2023年12月の欧州医薬品庁による肯定的な科学的見解を得たことを受け、2024年5月にはWHOの事前認証済医薬品リストに登録されました。そして、2025年3月に実装研究において就学前児童に初めて投与されたことは、10年にわたる取り組みの集大成といえる成果です。現在、コンソーシアムのADOPTプログラムを通じて、現地の医療プラットフォームに導入する作業が進められています。

## 今後の展望

arpraziquantelは2025年にWHOの必須医薬品モデルリストに掲載される見込みであり、その潜在的なインパクトはさらに拡大していくことが期待されます。ケニアのユニバーサルコーポレーションが現地での大規模生産に向けた準備も進めており、「アフリカのために、アフリカで製造する」という理念の実現に向けて前進しています。

今回得られた成果は、単なる科学的進歩にとどまらず、困難と思われた課題を、持続的なパートナーシップとコミットメントによって解決策に転換できることを証明しました。GHIT Fundは、新しく持続可能な医薬品にアクセスするための支援を続けており、その中で、arpraziquantelは公衆衛生分野におけるイノベーションを推進するグローバルなパートナーシップの力を示すものとなっています。

### 注目すべき インパクト



世界で  
5,000万人の  
就学前児童が  
感染リスクに直面



GHITの  
10年以上にわたる  
継続的な開発支援



GHITの  
製品開発支援で  
初めて必要とする  
人々の手に



2024年5月に  
WHOの事前認証  
済医薬品リストに  
登録



2025年にWHO  
必須医薬品  
モデルリストに  
収載見込み



コートジボワール、ウガンダ、  
ケニアで導入プログラムを実施中



セネガルとタンザニアでの  
準備も進行中

## 新たな小児用治療選択肢の開発への道のり

「現在、住血吸虫症に苦しむ就学前児童は十分な治療を受けていません。この問題を解決し、将来的には根絶を目指しています。住血吸虫症は『顧みられない熱帯病』として知られていますが、それ以上に就学前児童にとって深刻な健康課題であることを私たちはもっと認識する必要があるのです。」



ベアトリス グレコ  
メルク・グローバルヘルス研究所  
アクセス部長

## タンザニアでの住血吸虫症との闘い

「就学前児童に小児治療の選択肢を提供する取り組みは、タンザニアにとって非常に有益であり、地域社会における感染源を減らすことにもつながります。集団投薬による支援が、国民全体に行き渡ることを心待ちにしており、国としても万全の準備を整えています。」



クララ ジョーンズ ムワンサス  
タンザニア保健省  
NTDプログラムマネージャー

## ウガンダでの住血吸虫症との闘い

「現在、就学前児童は十分な治療を受けられず、感染を阻止することが困難な状況にあります。今回の新たな選択肢によって就学前児童が治療を受けられるようになれば、感染の連鎖を食い止められる可能性が高まります。幼少期での感染を防ぐことが何よりも重要です。」



アルフレッド ムバンギジ  
ウガンダ保健省  
媒介感染症&顧みられない熱帯病  
(VB & NTD)担当  
アシスタント・コミッショナー

## 研究者から見る住血吸虫症

「アフリカの子どもたちに持続的に薬を届けたいという想いで開発を進めてきました。難しい技術を使わず、できるだけシンプルな方法にすることで、アフリカで現地生産できるよう工夫しました。その結果、ようやくアフリカの就学前児童に薬が届けることができ、とても嬉しく思います。」



小島宏行  
アステラス製薬株式会社  
CMCディベロップメント  
製剤研究所長 博士(薬学)

# 2024年度投資採択案件



## シャーガス病／診断薬

TRP

アメリカ大陸で汎用できる慢性シャーガス病迅速血清診断キットの設計

長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科、  
テュレーン大学公衆衛生・熱帯医学部、  
Barcelona Institute for Global Health (ISGLOBAL)



平山 謙二 教授  
(長崎大学)

シャーガス病はクルーズトリパノソーマ原虫による慢性感染症で、主に南北アメリカで700万人以上が罹患しています。本プロジェクトは、各地の原虫の遺伝子情報を解析して抗体反応性部位を予測し、臨床血液の反応性を検証することで、1回で確認できる汎アメリカ万能迅速診断検査を設計します。このツールは、母子感染や未婚女性のスクリーニングに大きな威力を発揮すると期待されます。



## マラリア／治療薬

HTLP

新規の長時間作用型注射抗マラリア薬の早期リード化合物の創出

長崎大学 熱帯医学研究所、東京大学大学院 理学系研究科、  
塩野義製薬株式会社、Medicines for Malaria Venture (MMV)



加藤 信高 博士  
(長崎大学)

長時間作用型注射剤による化学予防薬の開発は、マラリアの予防および根絶に向けた取り組みにおいて極めて重要です。これらの注射製剤は、持続的な薬剤送達の信頼性の高い方法を提供し、特に医療アクセスが限られた地域での服薬遵守を向上させます。本プロジェクトでは、有望な2つのヒットシリーズを最適化し、最も適した候補を特定するとともに、MMVのLAI Early Lead Criteriaに適合する筋肉内化学予防薬の初期リードを推進することを目指しています。



## マラリア／治療薬

PDP

熱帯熱マラリアを予防するモノクローナル抗体の臨床試験薬の製造

PATH, GlaxoSmithKline Investigacion y Desarrollo, S.L.,  
エーザイ株式会社、愛媛大学



アシュリー バーケット 博士  
(PATH)

サハラ以南アフリカの小児における熱帯熱マラリア対策の新たなツールとして、マラリアモノクローナル抗体(mAbs)に対する関心が高まっています。予防的mAbsは1回の投与で迅速かつ強い防御を数カ月間もたします。本プロジェクトは、5歳未満の幼児、妊婦、旅行者や移住者などの高リスク群におけるマラリアを大幅に減らすことができ、新しいマラリア対策となる可能性があります。



## マラリア／治療薬

PDP

新規作用機序を有し活性および安全性の向上したGwt1p阻害剤の最適化および前臨床研究

エーザイ株式会社、  
Medicines for Malaria Venture (MMV)



堀井 孝昭 博士  
(エーザイ)

抗マラリア薬は耐性寄生虫の出現で無効化される危険性があり、新規かつ独自の作用機序に基づく治療が求められています。本プロジェクトでは、新規作用機序であるグリコシルフォスファチジルイノシトール(GPI)生合成阻害作用を有する抗マラリア薬を創出することを目的としています。独自の標的として見出したGwt1p酵素の阻害剤を探索し、バックアップとなる新たな候補化合物を創出します。



## 住血吸虫症／診断薬

PDP

WHOによる住血吸虫症の制圧および排除プログラムの支援に向けて: ビルハルツ住血吸虫感染を検出するための高感度かつ特異的な血清迅速診断テストの開発

Drugs & Diagnostics for Tropical Diseases (DDTD)、  
株式会社医学生物学研究所、長崎大学熱帯医学研究所、  
ケニア中央医学研究所



マルコ ピアモンテ 博士  
(DDTD)

住血吸虫症は世界で2億人以上が感染していると推定されています。WHOは最優先事項の一つとして対策を講じており、2021年には2つのターゲットプロダクトプロファイル(TPP)を発行しました。原因はマンソン住血吸虫(腸疾患)とビルハルツ住血吸虫(泌尿生殖器疾患)によるものですが、本プロジェクトでは、ビルハルツ住血吸虫に対しTPP準拠の迅速診断検査のプロトタイプを開発します。



## 結核／診断薬

PDP

結核のPoC迅速診断を目的とする尿中LAMの超高感度検出

Fluxus, Inc.、富士レビオ株式会社、  
ハイデルベルク大学病院



ヨハンナ サンドランド 博士  
(Fluxus, Inc.)

結核は毎年1,000万人が罹患し、125万人が亡くなる世界三大感染症の一つです。結核の検査は喀痰を用いた方法が主流ですが、喀痰が出ない患者に適用できないなどの課題があり、ポイントオブケア(PoC)検査薬の早急な開発が求められていました。本プロジェクトはPoCシステムおよび超高感度の尿中リポアラビノマンナン(LAM)測定試薬の開発を行い、結核の診断性能を向上させることが目的です。





## トラコーマ／診断薬

PDP

トラコーマの調査監視におけるTPP完全適合のファーストインクラス迅速診断検査

Drugs & Diagnostics for Tropical Diseases (DDTD)、株式会社医学生物学研究所、カーター・センター、Big Eye Diagnostics, Inc.



マルコピアモンテ 博士  
(DDTD)

トラコーマは42カ国で公衆衛生上の問題となっており、約190万人が失明または視覚障害を引き起こしています。世界保健機関 (WHO) は、2030年までに世界からトラコーマを撲滅するという目標を掲げました。本プロジェクトでは、トラコーマの原因となる病原体クラミジア・トラコマチスへの曝露を検出するため、WHO 発行のターゲットプロダクトプロファイル (TPP) の主要基準に準拠した迅速診断検査を供給します。



## デング熱／ワクチン

PDP

新規デング熱ウイルス様粒子 (VLP) ワクチン 第1相臨床試験

VLP Therapeutics, Inc.、長崎大学



赤畑 渉 博士  
(VLP Therapeutics, Inc.)

世界人口の約50%がデング熱の感染リスクにさらされており、現在、2種類の弱毒化ワクチンが薬事承認されていますが、安全性や有効性に改善の余地があります。本プロジェクトはウイルス様粒子 (VLP) を用いた初のデング熱ワクチン臨床試験です。VLPは感染性のある遺伝子物質を含まないため、VLPワクチンは乳幼児や免疫不全者にも接種でき、公衆衛生上のニーズに応えるものとなります。



## リーシュマニア症／診断薬

PDP

リーシュマニン皮内テスト (LST) 用cGMPグレード・ドノバンリーシュマニア抗原の製造および非臨床試験

オハイオ州立大学、長崎大学熱帯医学研究所、icddr,b



アベイ サトスカー 教授  
(オハイオ州立大学)

リーシュマニア症は感染した雌サシチョウバエの吸血で媒介され、3億5000万人が感染のリスク下にいます。感染暴露と免疫応答評価を目的に、リーシュマニン皮内テスト (LST) が長年行われてきましたが、LST用リーシュマニア抗原が入手不可能な状況です。本プロジェクトは、cGMPグレード・リーシュマニア抗原製剤の製造などにより、LSTの復活・再導入に繋げていきます。



## 住血吸虫症／診断薬

PDP

WHOによる住血吸虫症制圧・排除プログラムの支援に向けて：マンソン住血吸虫に対するTPP準拠の血清学的検査をフィールド試験および製造プロセス開発へ進める

Drugs and Diagnostics for Tropical Diseases (DDTD)、株式会社医学生物学研究所、長崎大学熱帯医学研究所、ケンア国立医学研究所、野口記念医学研究所、Big Eye Diagnostics, Inc.



マルコピアモンテ 博士  
(DDTD)

本プロジェクトの目的は、選定されたマンソン住血吸虫抗原に対してヒト宿主が産生するIgG1型抗体を、ターゲットプロダクトプロファイル (TPP) 完全準拠で、使いやすく低コストのポイント・オブ・ケアテストを提供することです。2027年には、WHOの診断の専門家レビュー委員会によるレビューとプログラムへの採用の準備が整う予定で、恵まれない地域に住む数億人の生活改善に役立てていきます。





### マラリア / 治療薬 Screening

抗マラリア活性を有する新規ヒット化合物の特性検証

Medicines for Malaria Venture (MMV)、第一三共株式会社



### シャーガス病 / 治療薬 Screening

DNDiと塩野義製薬によるスクリーニングプロジェクト

Drugs for Neglected Diseases initiative、塩野義製薬株式会社



### シャーガス病 / リーシュマニア症 / 治療薬 Screening

微生物培養液からのシャーガス病治療薬シード化合物の探索

北里大学、長崎大学、東京大学、Drugs for Neglected Diseases initiative



### デング熱 / ジカ熱 / 治療薬 Screening

フラビウイルス感染症治療薬創出に向けた新規抗ウイルス活性化合物の探索

エーザイ株式会社、Drugs for Neglected Diseases initiative



### ラッサ熱 / 治療薬 Screening

ラッサ熱に対する化合物探索プログラム

Medicines for Malaria Venture (MMV)、理化学研究所



### リフトバレー熱 / 治療薬 Screening

リフトバレー熱に対する化合物探索プログラム

Medicines for Malaria Venture (MMV)、理化学研究所



### エボラ出血熱 / マールブルグ病 / 治療薬 Screening

エボラ出血熱とマールブルグ病に対する化合物探索プログラム

Medicines for Malaria Venture (MMV)、理化学研究所



### チクングニアウイルス / 治療薬 Screening

チクングニアウイルスに対する新規化合物同定のためのAIベースのスクリーニング

Medicines for Malaria Venture (MMV)、エーザイ株式会社



# 2024年度の活動ハイライト

GHIT Fundは第3期(2023年度~2027年度)の2年目を完了し、第3次5カ年計画「GHIT 3.0」を着実に推進しています。

2024年度はパートナーシップをさらに拡大し、「イノベーションの加速」、「製品開発の投資インパクトを最大化」、「パートナーシップで生み出す化学反応」の戦略の3本柱をもとに、変化を大きな力に変えた1年でした。

パートナーとともに成し遂げた活動のハイライトをお伝えします。



2024年11月

## Open Philanthropyからの資金的支援確保



米国サンフランシスコに拠点を構える助成金交付団体Open Philanthropy(オープン・フィランソロピー)が、スポンサーとしてGHIT Fundのパートナーに参画しました。

このパートナーシップは、貧困国を含む世界の人々の健康のために研究開発を推進するにあたり、GHIT Fundが民間セクターおよび個人からの資金調達を強化する取り組みに対して支援を行うものとなり、GHIT Fundは第3次5カ年計画であるGHIT 3.0に沿って、資金面における新たな参画・協力をグローバルヘルスの研究開発の推進と拡大につなげ、顧みられない感染症への取り組みをさらに加速します。

2024年12月

## WHOの「顧みられない熱帯病に関するロードマップ2021-2030」の達成に向けてWHOとの新たなパートナーシップを締結



GHIT Fundと世界保健機関(WHO)は、顧みられない熱帯病(NTDs)の分野に関して、安全で有効かつ安価な医薬品、ワクチン、診断薬へのアクセスを促進することを目的とした覚書を新たに締結しました。「NTDsの革新的なツールや治療の強化を目的とした研究開発」「持続可能な調達システムや投資促進を目的としたケーススタディやツールを開発するための資金調達」「国際社会および各地域でのNTDsの認知度向上に向けた活動」「WHOが招集するNTDsワーキンググループおよびタスクフォースへのオブザーバー機能」の4つの分野において協業します。

2024年10月・11月

## 「JACLaS EXPO 2024」「BioJapan 2024」など展示会に初出展



2024年10月、パシフィコ横浜で開催された日本最大の臨床検査分野の展示会「JACLaS EXPO 2024 臨床検査機器・試薬・システム展示会」および世界で最も歴史のあるバイオテクノロジー展「BioJapan 2024」の2つの展示会に、GHIT Fundは初めて出展しました。

また、米国ニューオーリンズで11月に開催されたAmerican Society of Tropical Medicine and Hygiene(ASTMH)にも参加し、マラリア・結核・顧みられない熱帯病の研究開発プロジェクトへの投資(助成)の進捗状況や、国内外の企業、海外の大学や国際機関などとのパートナーシップ、GHIT Fundの投資(助成)プログラムについて展示・説明しました。

2024年10月

## 第9回GHIT Fund「プロポーザル作成セミナー」を実施



2024年10月、GHIT Fundは第9回「プロポーザル作成セミナー (Zoom Webinar)」を主催し、企業、大学、研究機関、NGO/NPOなど、GHIT Fundの投資(助成)事業に関心のある方々に多数ご参加いただきました。

このセミナーの目的は、GHIT Fundの投資(助成)プログラムへの申請書類(プロポーザル)作成に関する理解を深めることです。GHIT Fundの「標的研究プログラム」と「製品開発プログラム」に焦点を当て、プロポーザル作成時の留意点や重要な記載方法について解説を行いました。

2025年1月

## 「第二回 顧みられない熱帯病コンテスト」を支援



世界NTDの日・日本実行委員会は、中学生から大学院生を対象とした「第二回 顧みられない熱帯病コンテスト」を開催しました。GHIT Fundは初回に引き続き支援しました。

NTDsに対する認識を深め、持続可能な開発目標達成に向けた取り組みへの促進を目的とした本コンテストにおいては、若い世代がNTDsを「自分ごと」として捉え、自分自身や日本の企業・団体などの貢献の在り方を考えることが重要です。本年は合計35チーム/56名の応募があり、1月30日の「世界NTDの日」に表彰式とウェビナーが行われました。

2024-2025年

## 國井修のグローバルヘルス談義「SDGs Talk」—あの子たちを死なせない—を展開



持続可能な開発目標（SDGs）では、目標3の中で「2030年までに、エイズ、結核、マラリアおよび顧みられない熱帯病といった伝染病を根絶するとともに肝炎、水系感染症およびその他の感染症に対処する」がターゲットとして設定されていますが、治療や予防のための製品が不十分で、多くの人が苦しみ、見過ごされているのが現状です。

この「見過ごされている」疾患について多くの方に知っていただくため、GHIT Fund CEO 國井修がゲストを招き、グローバルヘルスを取り巻く現状を伝える〈國井修のグローバルヘルス談義「SDGs Talk」〉をスタートしました。

第1回のアルピニストで環境活動家の野口健さんとの対談では「気候変動と感染症」や「これからの挑戦」を、第2回はエッセイスト・小説家の阿川佐和子さんとグローバルヘルスの分野でも大事な「コミュニケーション力」について語っています。ジャーナリストの堀潤さんを迎えた第3回は自分ごとにする「NTDs」について双方の経験を元に深掘りをし、タレント・エッセイストの小島慶子さんを迎えた第4回では「情報を可視化することの重要性」について議論しました。

2025年1月

## アフリカ各国の保健省が語る「住血吸虫症との闘い」動画シリーズの公開



「顧みられない熱帯病（NTDs）」の一つである住血吸虫症は、成人や学齢期の子どもには安全で効果的な治療薬が存在していますが、6歳未満の小児に適した治療薬がないために5,000万人の就学前児童が公的な医療プログラムで治療されていません。

GHIT Fundは、2013年から小児用プラジカンテル・コンソーシアムの住血吸虫症の小児用製剤の研究開発を支援しています。コンソーシアムのメンバーであるメルク（本社・ドイツ）、アステラス製薬株式会社（本社・日本）、アフリカ各国の保健省の方々に住血吸虫症との闘いについてインタビューした動画のシリーズを作成し、公開をしました。

動画では、メルクから、ベアトリス・グレコ氏とジェレミー・グロサス氏を迎え「小児用治療薬の開発への革新的な道のり」について語っていただきました。またタンザニア、ウガンダ、セネガル、ケニアのアフリカ4カ国の保健省の担当者や、アステラス製薬の研究者が、各国の住血吸虫症との闘いにおける現状と課題を伝えています。

2024年12月

## 「港区ふるさと納税」を通じて、顧みられない感染症との闘いへのサポートが可能に



港区 ふるさと納税での  
ご支援をお願いします。



東京都・港区版ふるさと納税制度「団体応援寄付金」を利用して、GHIT Fundをご支援いただけるようになりました。

GHIT Fundは、港区版ふるさと納税制度「団体応援寄付金」の対象団体となっています。本制度の寄付指定先に「公益社団法人グローバルヘルス技術振興基金」を指定して港区へ寄付をしていただくと、寄付受付期間(1月～12月)の翌年度に寄付金の7割を上限として港区からGHIT Fundへ補助金が交付されます。いただいた補助金は、開発途上国にまん延する感染症の治療薬、ワクチン、診断薬の研究開発などのGHIT Fundの事業活動に、大切に活用させていただきます。

ふるさと納税に対する返礼品はありませんが、確定申告またはワンストップ特例制度を利用することで、寄付金額の2,000円を超える部分について、一定の限度額まで原則として所得税・住民税から全額が控除されます。

\*ふるさと納税制度は、日本の地方自治体に寄付を行う制度で、寄付ができるのは個人に限られます。

\*詳しくは港区のホームページをご参照ください。

2024-2025年

## GHIT FundのDiversity(多様性)、Equity(公平性)、Inclusion(包括性)への取り組み



2024年4月、GHIT FundのCEOを委員長とするダイバーシティ推進委員会を立ち上げました。

ダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン(DE&I)に取り組むことは、研究開発への投資(助成)とグローバルなパートナーシップを通じて顧みられない感染症に対する日本のイノベーションを推進するというGHIT Fundの使命を果たす上で極めて重要です。

GHIT Fundは、ダイバーシティ(多様性を尊重し、チームやパートナーシップを多様化することで、グローバルヘルス・コミュニティに貢献し、様々な視点や立場から考察)、エクイティ(研究開発格差が根深く存在しているグローバルヘルスの領域において、アクセスを阻む障壁を取り除き、格差の解消の実現)、インクルージョン(誰もが尊重され、意見を聞いてもらえるような、包括的で協力的な環境づくり)に重点を置いて活動を推進しています。また、DE&Iに関する方針をホームページ上にも公開し、ジェンダー平等やグローバルパートナーとしての取り組みについても情報開示をしています。

Forbes JAPAN

×

GHIT Fund

Forbes JAPAN × GHIT Fund

タイアップ企画

Partnerships for Global Health Innovation

# パートナーシップで グローバルヘルスの 課題を解決する

GHIT Fund CEOの國井修と世界を舞台に活躍する企業のリーダーが、グローバルヘルスの課題解決や日本が担うべき役割を紐解く連載企画が「Forbes JAPAN BrandVoice」に掲載されました。

「ヘルスイクイティ(健康の公平性)」を掲げるメルクのジェレミー・グロサス氏との対談ではグローバルヘルスにおける持続可能な協働のあり方について、また、健康課題にテクノロジーで貢献するNECの前川健太郎氏との対談ではアフリカをはじめとするグローバルヘルスのデジタルソリューションについて、議論を行いました。※所属・役職は取材当時のものです。



## ジェレミー・グロサスさん

メルクバイオフィーマ 代表取締役社長

約10年の歳月をかけて開発された「見過ごされてきた」熱帯病である住血吸虫症の小児用治療薬が、2025年3月、アフリカの就学前の子どもたちに実装研究の枠組みで新しい治療の選択肢として届けられました。これは日本と海外の製薬企業や研究機関を含む国際的な官民パートナーシップ(小児用プラジカンテル・コンソーシアム)が、実を結んだ成果です。グロサス氏とGHITの國井が、持続可能な協働モデルの構築について熱く語り合いました。



## 前川健太郎さん

NEC グローバル事業推進統括部 統括部長

顔認証技術から指紋認証システム、AI創薬まで、最先端テクノロジーがどのように健康課題解決に貢献できるのかをテーマに、NECの前川氏とGHITの國井が対談しました。デジタル技術導入によるワクチン接種の時間短縮や、保健師の業務効率化など、テクノロジーを通じたグローバルヘルスへの貢献について意見交換を行いました。

インタビューはForbes JAPAN  
特設ウェブサイトでご覧いただけます。



第3次5カ年計画「GHIT 3.0」前進への着実な道のり

# ストラテジックプラン FY2023-FY2027

## R&D 研究開発の推進と製品化の実現



## 1 イノベーションの加速



グローバルにイノベーションを加速するため、オープン&共創的な研究開発を促進するGHITは、5年ぶりに対面でのR&D Forumを開催しました。120名を超えるグローバルヘルスの専門家が一堂に会したこのイベントでは、現場からの視点を強化し、パートナーシップネットワークを深化させるとともに、GHITの重点領域であるマラリア、結核、NTDへの取り組みを推進することができました。同時に、GHITモデルをパンデミック対策へ応用する可能性について検討を進めています。

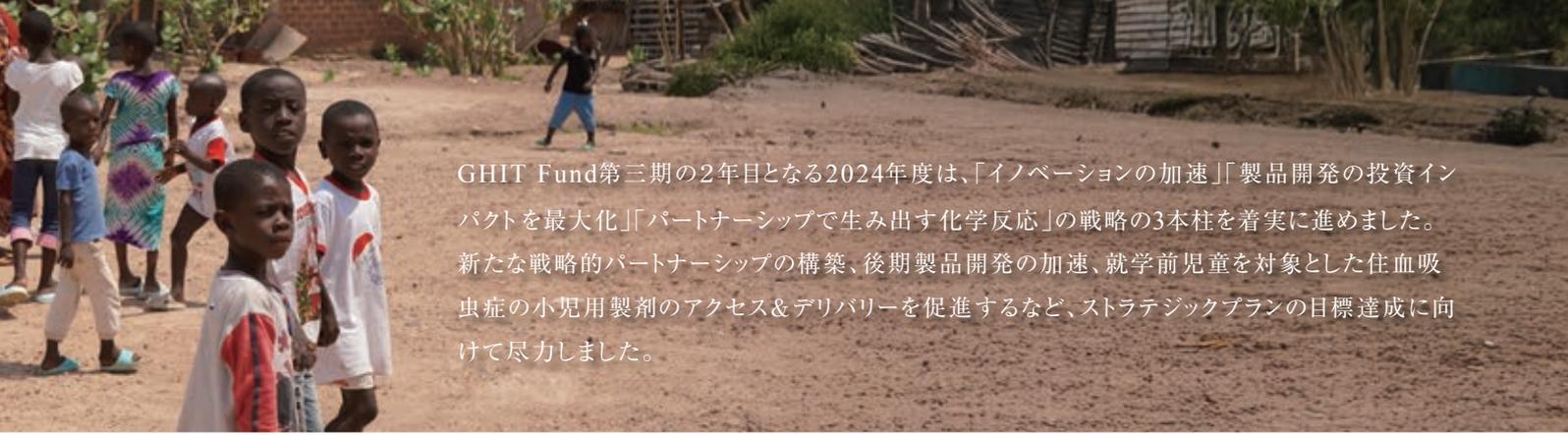
## 2 製品開発の投資インパクトを最大化



製品が現場にもたらすインパクトに注目することで、製品開発の加速化、ポートフォリオとリソースの最適化を進めてきました。また2024年度はコンプライアンスやリスク管理を強化し、文書整備を含む制度整備の充実を図りました。さらに持続可能な組織と人材の確保を見据え、社員へのトレーニングも推進しました。



# GHIT 3.0



GHIT Fund第三期の2年目となる2024年度は、「イノベーションの加速」「製品開発の投資インパクトを最大化」「パートナーシップで生み出す化学反応」の戦略の3本柱を着実に進めました。新たな戦略的パートナーシップの構築、後期製品開発の加速、就学前児童を対象とした住血吸虫症の小児用製剤のアクセス&デリバリーを促進するなど、ストラテジックプランの目標達成に向けて尽力しました。

2025年3月31日時点



### 3 パートナーシップで生み出す化学反応



私たちは、低中所得国とのパートナーシップを強化し、R&Dからアクセス&デリバリーまで一貫したエコシステムの構築を目指しています。2024年5月には、WHOおよびアフリカ6か国の代表を招聘し、日本政府、国連開発計画（UNDP）、GHITが共同運営するUniting Effortsとともに、住血吸虫症に対する就学前児童への新たな治療選択肢の導入を見据えた戦略会議を開催しました。さらに12月にはWHOと覚書（MOU）を締結し、より深い協力関係を通じて研究開発を加速しています。

## 戦略の3本柱



浦辺 隼  
投資戦略  
アソシエイトヴァイスプレジデント  
(部門長)

GHIT 3.0の2年目を終える2025年3月、設立当初からGHITが支援を続けてきた就学前児童向けの住血吸虫症の小児用製剤が、実装研究としてウガンダ、コートジボワールの2～5歳の子どもたちへ届きました。GHITにとって飛躍的な前進であると同時に、自ら掲げた「研究と社会をつなぐ」「日本と世界をつなぐ」「先端技術を途上国につなぐ」という3つの指針を具現化した瞬間でもあり、現地でパートナーとともにこの重要なマイルストーンを達成した喜びを分かち合えたことに心が躍りました。

# 財務報告

## 2024年度決算書概要

### 貸借対照表

資産の部		百万円
流動資産		75.6
固定資産		11,083.8
資産合計		11,159.4

負債の部		百万円
流動負債		78.6
固定負債		8.0
負債合計		86.6

正味財産の部		百万円
指定正味財産		11,072.8
一般正味財産		-
正味財産合計		11,072.8
負債及び正味財産合計		11,159.4

本概要は、有限責任監査法人トーマツの監査に基づくGHIT Fundの監査済財務諸表（第13期令和6年4月1日～令和7年3月31日）から抜粋したものです。GHIT Fundは、公益社団法人として日本国内に登録されています。

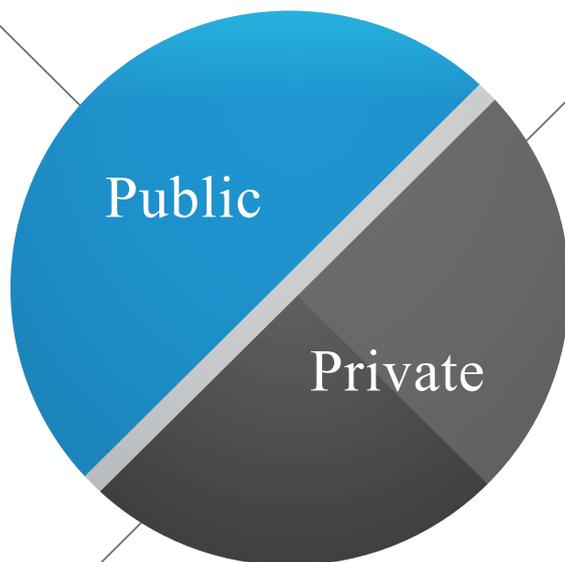
### 資金拠出パートナー&スポンサー

#### Full Partners



#### Full Partners

Gates Foundation



## 正味財産増減計算書

一般正味財産増減の部		百万円
<b>経常収益</b>		
受取補助金等		4,562.8
受取寄附金		719.2
為替差益		0.2
雑収益		7.7
<b>経常収益計</b>		<b>5,289.9</b>
<b>経常費用</b>		
事業費		5,084.1
管理費		205.3
<b>経常費用計</b>		<b>5,289.4</b>
<b>経常外費用</b>		
経常外費用		0.5
<b>経常外費用計</b>		<b>0.5</b>
<b>指定正味財産増減の部</b>		<b>百万円</b>
受取補助金等		
受取助成金(政府、国際機関等)		4,416.1
受取助成金(財団)		2,273.4
受取寄附金		1,006.7
<b>指定正味財産合計</b>		<b>7,696.2</b>

### Full Partners



### Associate Partners



### Affiliate Partners



### Sponsors



2025年3月31日時点

# リーダーシップ

## 評議会

GHIT Fundに資金を拠出している日本政府、財団、民間企業により構成され、評議会と理事会メンバーの選任または解任、定款の変更、決算書類の承認など、法令または定款に定められた重要事項の決議を行います。



**中村 亮**  
外務省  
地球規模課題審議官(大使)



**井上 肇**  
厚生労働省  
大臣官房 国際保健福祉交渉官



**トレバー マンデル**  
ゲイツ財団  
グローバルヘルスプログラムプレジデント



**ヨン=アルネ ロッティンゲン**  
ウェルカム  
CEO



**アステラス製薬株式会社**  
安川 健司  
代表取締役会長



**エーザイ株式会社**  
内藤 晴夫  
代表執行役CEO



**塩野義製薬株式会社**  
手代木 功  
代表取締役会長兼社長 CEO



**第一三共株式会社**  
眞鍋 淳  
代表取締役会長 会長執行役員



**武田薬品工業株式会社**  
クリストフ ウェバー  
代表取締役社長 CEO



**中外製薬株式会社**  
奥田 修  
代表取締役社長 最高経営責任者(CEO)

## 理事会

グローバルヘルスマネジメントの領域で豊富な経験を持つエキスパートにより構成され、リーダーシップチームの業務を監督し、重要な規程、中期戦略・年次計画および予算、投資案件の承認など業務執行に係る重要事項の決議を行います。



会長・代表理事  
**中谷 比呂樹**  
慶應義塾大学医学部  
訪問教授



副会長  
**ピーター ピオット**  
ロンドン大学衛生熱帯医学大学院教授  
欧州委員会委員長 特別顧問



専務理事  
**國井 修**  
GHIT Fund CEO



**カライシャ アブドゥル カリム**  
南アフリカ・エイズ研究プログラムセンター(CAPRISA)  
共同創設者兼次長 コロンビア大学  
メルマン公衆衛生大学院教授(疫学)  
クワズル・ナタール大学副学長代理(アフリカ保健)



**アン ヴェネマン**  
元国連児童基金(UNICEF)事務局長  
元米国農務長官



**喜多 洋輔**  
外務省  
国際協力局  
国際保健戦略官



**高橋 順一**  
厚生労働省  
大臣官房国際課 国際保健・協力室長



**マヒマ ダトラ**  
バイオロジカル・イー・リミテッド社  
マネージングディレクター



**門間 大吉**  
株式会社国際経済研究所  
副理事長



監事  
**石黒 光**  
株式会社インスパイア  
監査役



監事  
**コー ヤンタン**  
元世界銀行副総裁兼法律顧問  
元ハーバード大学/イエール大学ロースクール講師  
国際弁護士



監事  
**中村 さおり**  
平山・流矢・白井法律事務所  
弁護士



オブザーバー  
**ケイティ アインテルス オウエン**  
ゲイツ財団  
顧みられない熱帯病/  
ワクチン開発部門 ディレクター



オブザーバー  
**ニコラス キヤマック**  
ウェルカム  
チーフ・リサーチ・プログラム・オフィサー(臨時)

## 選考委員会

治療薬、ワクチン、診断薬における研究開発において豊富な知識と経験を持つ国内外のエキスパートにより構成され、プログラム申請者からの申請書および進捗報告書の審査・評価を行い、その結果に基づいて、理事会に対して投資案件を推薦します。なお投資プログラムとの利益相反の可能性を排除するため、選考委員会には民間企業の役員員を含んでいません。



選考委員長  
**アン ミルズ ドゥガン**  
コンサルタント



**石井 健**  
東京大学医科学研究所 教授



**上村 尚人**  
大分大学医学部臨床薬理学講座 教授



**スー・アン・コスタ・クレメンズ**  
オックスフォード大学 小児医学部小児感染症  
グローバルヘルスおよびワクチン学教授  
シエナ大学グローバルヘルス研究所所長



**小山 裕雄**  
国立研究開発法人 理化学研究所  
環境資源科学研究センター  
創薬化学基盤ユニット ユニットリーダー



**フィリップ ジョーダン**  
オックスフォード大学イノベーション  
プリンシパル・ライセンシング&  
ベンチャー・マネージャー



**田部 陽子**  
順天堂大学薬学部病態解析学 教授  
順天堂大学医学部臨床検査医学 教授(併任)



**ケン ダンカン**  
ゲイツ財団  
Discovery & Translational Sciences部門次長



**アナ カリン テイデン**  
創薬化学専門家



**サリー ニコラス**  
ウェルカム  
保健システム・環境部門 責任者



**矢島 理恵子**  
スタンフォード大学医学部  
SPARKプログラムトランスレーショナルリサーチャー  
創薬イノベーションディレクター



**ポール ヨルゲンセン**  
コンサルタント

## リーダーシップチーム

事業や投資戦略の策定、理事会の承認に基づいた戦略の遂行、管理業務の実施、および組織の成長を促進します。



**國井 修**  
CEO



**浦辺 隼**  
投資戦略  
アソシエイトヴァイスプレジデント(部門長)



**酒井 伸**  
コーポレート・オペレーションズ  
アソシエイトヴァイスプレジデント



**関 一恵**  
エクスターナルアフェアーズ &  
コーポレートディベロップメント  
ディレクター



**高澤 美保**  
ファイナンス & オペレーションズ  
シニアディレクター



**麦谷 英理子**  
ブランドコミュニケーション  
ディレクター

# 資金拠出パートナー & スポンサー

GHIT Fundの投資事業や組織運営は、資金拠出パートナーやスポンサーの多大な支援によって成り立っています。皆様からのご支援ご協力に心より御礼申し上げます。

## Full Partners



外務省



厚生労働省



国連開発計画



ゲイツ財団



ウェルカム



アステラス製薬株式会社



中外製薬株式会社



第一三共株式会社



エーザイ株式会社



塩野義製薬株式会社



武田薬品工業株式会社

## Associate Partners



富士レビオ・  
ホールディングス株式会社



大塚製薬株式会社



レメディ・アンド・カンパニー  
株式会社

## Affiliate Partners



富士フイルム株式会社



協和キリン株式会社



Merck KGaA



田辺三菱製薬株式会社



住友ファーマ株式会社

## Sponsors



株式会社  
パーソン・ジャパン



Diligent Japan合同会社



栄研化学株式会社



Forbes JAPAN



森ビル株式会社



モリソン・フォースター  
法律事務所



Open Philanthropy



株式会社  
セールスフォース・ジャパン



ZVC JAPAN株式会社

2025年3月31日時点

## パートナーシップで感染症と闘う国際機関



### 組織概要

名 称	公益社団法人グローバルヘルス技術振興基金 Global Health Innovative Technology Fund
所在地	〒106-0032 東京都港区六本木一丁目9番10号 アークヒルズ仙石山森タワー25階 TEL:03-6441-2032 FAX:03-6441-2031
設立日	2012年11月6日(2013年4月より事業開始)
会長・代表理事 CEO・専務理事	中谷 比呂樹 國井 修
事業内容	1. 開発途上国向け医薬品開発におけるグローバルな連携の推進 2. 医薬品開発のグローバルな連携への投資 3. 日本のグローバルヘルス分野における国際貢献の推進と強化
ウェブサイト	<a href="https://www.ghitfund.org/jp">https://www.ghitfund.org/jp</a>

パートナーシップで感染症と闘う



Global Health Innovative Technology Fund

公益社団法人グローバルヘルス技術振興基金

〒106-0032 東京都港区六本木一丁目9番10号 アークヒルズ仙石山森タワー25階 TEL: 03-6441-2032 FAX: 03-6441-2031 [www.ghitfund.org/jp](http://www.ghitfund.org/jp)

Copyright © Global Health Innovative Technology Fund / 2025.06